第236回（4月）

「アジアの経済発展と産業物資−紙資源から見た構造変化」

日本紙パルプ商事株式会社 管理本部企画部副部長 芳賀浩氏

情報化時代に入って、ペーパーレスの時代に突入するかに見えたが、実際には紙の使用量は、かえって増加した。その意味で、経済発展と紙の需要は相関関係にあり、紙の需給関係が、経済発展の先行指数としても使える。日本の需給バランスは、従来は輸出が輸入を越えていたが、東南アジアでの自家生産が増え、今は輸入の方が多い。

紙は、文化の発展に比例して需要が増えるのだが、この視点からのみ見たのでは誤ることがある。すなわち、紙・板紙を原料として輸入し、加工して輸出している場合や、中継地として紙が通過する場合でも、統計上は生産量に入ってしまうからである。

人類は先史以来、森林を切り開いて文明を起こし、その結果として森林資源を破壊してきたという非難は避けられない。最近になって、ブラジル、南アフリカ、オーストラリアなどで再植林が行なわれ、植林―間伐―伐採―再植林のサイクルがうまく機能し始めている。日本の大手製紙会社も海外植林を積極的に開始した。加えて、世界的な規模での古紙利用率アップが行なわれてきている。

我が国の紙原料は、古紙、古紙パルプの使用比率が53.3％と高く、バージン原料も、そのほとんどが製材屑で占められ、自然環境破壊に直結しているとは言えない。

安さ、加工のし易さ、一覧性、印刷特性など、紙の利点は計り知れない。情報メディアの発達によって、今後は、紙もマルチメディア時代の情報ツールのOne of themであるべきだ。

人口12億人の中国、同じく10億人弱のインドが、目覚ましい経済発展を遂げたとすると、紙は大変な供給不足となる。これは確実な問題である。そこで、各国とも設備の新・増設を急速に行なっている。この結果、98年には紙の生産の２分の１、板紙のほとんどをアジア製品が占めるようになる。

2000年の時点で日本を除くアジア諸国の生産比率が上昇する。紙は輸送コストに耐えない製品であるから、生産と消費は、ほぼ同じ地域内で行なわれる。その意味で、21世紀はアジアの時代だということができる。